

アンデルセンの世界①
— 21世紀へ伝えたい豊かな世界—

佐藤 義 隆

文学部英文学科

(1999年9月16日受理)

The World of Andersen (1)
A Rich World that We Want to Hand down to the Twenty-first CenturyDepartment of English Literature, Faculty of Literature,
Gifu Women's University, 80 Taromaru Gifu, Japan

Yoshitaka Sato

(Received September 16, 1999)

<要旨>

文学作品を研究する場合、作家の人生や時代背景を考慮することなく、作品そのものの中だけでその作品を分析するニュー・クリティシズムのような批評方法もありますが、作家の人生や時代背景を入れて分析した方がその作品をよりよく理解できる場合があります。アンデルセンの場合はその典型的な例で、彼の作品には、殆ど全ての作品に自分自身が投影されています。この論文では、そうしたアンデルセンの人生や時代が、いかに彼の作品に投影されているかを検証します。また、彼の作品は弱者側に立って書かれていて、そのことが読む者に人生の指針のようなものを与えてくれて、読む者の心を豊かにしてくれます。だからアンデルセンの作品を未来へずっと読みついでいて貰いたいという思いからこの論文を書きました。

1 アンデルセンとドラえもん

ドラえもんを読んでいると、不二子不二雄さんは、アンデルセンを相当読んでいて、そこから多くのアイデアを得ていることがわかります。アンデルセンの童話をパロディ化したものだとすぐわかるものとしては、ドラえもん全集全45巻中、第八巻にでてくる「マッチ売りのドラえもん」とか、第十九巻にでてくる「幸せな人魚姫」とかがあります。また第二十八巻の「なぜか劇がメチャクチャに」の中にも、「人魚姫」の話がでてきます。

しかし、アンデルセンの童話集その他をしつかり読んでいくと、他にもドラえもんの中の色々なアイデアがそこからきているのではないかと思われるものが結構あるのです。例えば、アンデルセンがコペンハーゲン大学の学生だったころに書いた『ホルメン運河からアマゲル島東端までの徒歩旅行』という作品の中で、主人公が、詩の題材を求めて、西へ東へ行くのですが、その途中で、聖ペテロに出会って、不思議なメガネを貰います。これをかけると、何でも奥までみえたり、未来のことまでみえてきたりするのです。また、彼

が、1869年、64才の時に書いた童話、「うまい思いつき」には、詩人になりたいけれど、詩が書けない青年に、占いのばあさんが、どっちを向いても詩を作る材料はいっぱいあるんだと言って、不思議なメガネと耳ラップを貸してくれて、名声を得たいなどという考えは一切捨てて、身近にあるものをみてその声に耳を傾ければ、物語はすぐに書けると言うところがあります。これらの不思議なメガネは、ドラえもん第十八巻にのっている「タンポポ空をゆく」に出てくる、ファンタグラスにいかされているのではないのでしょうか。

ファンタグラスというのは、スキーのゴーグルのような形をしたメガネで、このファンタグラスをつけると、捨てようとしていたタンポポが、捨てられたくないよーと、泣いて哀願している姿がみえてきます。そこで、よくしてやると、笑って感謝している姿がみえてきます。その時すかさずドラえもんは、このようにやさしくすることは、君が心の底で思っていることなんだよ、と解説してくれます。面倒なことはしたがらないのび太ですがそうした自分の心の中にも、本当はやさしくできる心があることを、ファンタグラスによって知ることができたのです。草一本、虫一匹でも、同じ生きものなのだから大切に愛する心を失わなければ、自然に心が通いあって豊かな人間になれるということをのび太はファンタグラスを通して知っていきます。このファンタグラスは、もう一人の自分の声の象徴とでもいいと思います。心にゆとりをもって色々なものを眺めれば、こうしたタンポポの姿もみえてきて、自然にやさしくなれると思います。そういう心も一人一人がもっているということです。しかし人は忙しい毎日の中で、そういう気持ちを忘れてしまいます。忙しいという字は、心が亡くなると書

きます。ファンタグラスのお世話にならなくても、心にゆとりをもち、心を亡くさないでいたいものですね。

また藤子さんが、どうしてタンポポにしたかという、これもアンデルセンが1855年50才の時に書いた「ちがいがあります」というタイトルの童話にでてくるタンポポが頭にあったのだと思います。そこには、人間の間にも違いがあるように、植物の間にも違いがあって、美しいリンゴの花もあれば、貧相なタンポポの花もあるが、それぞれ神様からの恵みを授かっていて、同じ価値があるのだ！神様の愛は、全てにいきわたっているのだ！というようなことが書かれていて、こうしたところから藤子さんはタンポポを採用したのではないのでしょうか。

そもそも、ドラえもんがどうしてのび太と暮らすようになったのかという、のび太の孫の孫であるセワシが、ドラえもんを連れて未来の国からタイムマシンでのび太のところへやってきた理由を知らなければなりません。それは、第一巻に書いてあるように、このままほっておくと、のび太は19年後に、ジャイアの妹ジャイ子と結婚する運命にあるので、その運命を変えるために、教育係りのネコ型ロボットドラえもんを連れてやってきたわけです。平成11年9月3日の中日新聞夕刊に、富山大学の先生がドラえもんのホームページを設けて、これから学問として研究していくことにしたというニュースがのっていました。次の日の同新聞の朝刊には、中日春秋の筆者が早速そのホームページを開いて、そこに書いてあることを一部紹介していましたが、それによるとドラえもんの職業は特定意志薄弱児監視指導員となっています。特定意志薄弱児であるのび太をドラえもんが監視、指導して、何とかジャイ子と結婚させないようにしようというわけです。ジャ

イ子と結婚するとどうなるかという、のび太は自分で会社を始め、倒産して借金取りに追い回される日々が続く、100年たっても返し切れず、子孫は貧乏で苦しめられ、セワシのお年玉も50円という、お先真っ暗な未来のため、どうしてもそれを阻止しなければならないとして、セワシとドラえもんがやってきたわけです。

セワシとドラえもんは22世紀からやってきました。はっきりした年号としては2125年が二度出てきます。第10巻には2125年にセワシがとっている『小学四年生』のことがでてきますし、第21巻にのっている「未来の町にただ一人」の中では、のび太がタイムマシンで2125年にドラえもんの時代へ行くことができています。ドラえもんの誕生日は2112年9月3日ですから、この時彼は13才ということになります。この時代設定もアンデルセンの『ホルメン運河からアマゲル島東端までの徒歩旅行』から得ているのではないかと思います。

この作品の主人公は、2128年と書いてあるプラカードの立っている御殿へ入って、そこで有名人や科学の成果をまのあたりにします。ドラえもんの2125年とアンデルセンの2128年、3年の違いしかありませんね。また、「どこでもドア」の発想もアンデルセンの童話「幸福の長靴」からきているのではないかと思います。この長靴をはくとそのとたんに、その人はその人の一番望んでいる場所なり時代へ連れていってくれるものです。またアンデルセンが1839年、34才の時に書いた童話「パラダイスの園」では一つの花の上に、歴史や地理とか、掛算の九九が書いてあって、それを食べれば勉強ができるようになるということが書いてあって、これがドラえもんの「暗記パン」の発想につながったのではないのでしょうか。これらの他

にジャイ子の漫画家としてのペンネームはクリスチーネ剛田ですが、クリスチーネという名もアンデルセンの童話に出てきますし、のび太は綾取りが好きですが、アンデルセンも少年の頃から女の子の遊びが好きだったことをあげて、アンデルセンとドラえもんの関係の話はここまでにしたいと思います。余談ですが、日本の漫画は海外で評価が高く、ドラえもんは3千万冊売れているそうです。因みに日本では一億冊以上売れているそうです。また、日本の漫画を日本語で読みたいために日本語を学ぶ学生が増えているそうです。漫画恐るべしですね。

藤子不二雄さんがアンデルセンから多くのアイデアを学んでいることがわかりましたが他にも日本のアンデルセンといわれている小川未明さんやまどみちおさんがいます。まどさんは日本人として初めて国際アンデルセン賞の作家賞を受賞しておられます。これは児童文学界のノーベル賞といわれているものです。また、イギリスのオスカー・ワイルドもアンデルセンの影響で童話集を2冊出しています。彼の「幸福の王子」や「わがままな巨人」がアンデルセン的なのはそのためです。更に調べていけば、アンデルセンの影響は世界的であることがわかってきます。これほどの影響を与えたアンデルセンの童話がどのようにして誕生するに至ったのかを彼の人生経験とからめながらみていこうと思います。

2 生い立ちから少年時代まで

ハンス・クリスチャン・アンデルセンは1805年4月2日にデンマークのフューン島のオーデンセに生まれました。(図1参照)1805年という年は、日本では江戸幕府が衰え、列強が日本へ接近し始めた頃にあたります。1804年にはロシアのレザノフが長崎へ来て、幕府に通商を求めています。ヨ一



ロップでは、1804年にナポレオンがフランスの皇帝になり、イギリスやロシアを敵にまわしていました。デンマークはフランスと同盟を結んでいたため、イギリスから砲撃を受けたり、封鎖されて、不況に苦しんでいました。アンデルセンが生まれた頃のデンマークの政治情勢はこのようなものでした。

アンデルセンの父は貧しい靴職人でした。アンデルセンという名前からもその貧しさがわかります。アンデルセンの最後のセンという言葉は、「だれだれの息子」という意味でそれがついている名前は、貧しい家の出ということがすぐにわかりました。なぜならきちんとした名前ももらえずに、「だれだれの息子」という姓だからです。このことを取り上げた童話もアンデルセンは書いています。1859年、54才の時に書いた「子供のおしゃべり」という童話がそれです。ある裕福な商人の家で、子供達のパーティがありました。みんな金持ちや上流の子供達ばかりのパーティです。子供達は一人ずつスピーチを

しますが、一人の可愛い女の子の番になり、その子はちょうど「大草原の小さな家」にでてくるネリーという少女のように、凄い自慢屋さんで、「私は侍従の子よ」と得意がります。侍従というのは天皇や王様の側近の官ですから、その子は自分の血筋を自慢しているわけです。そしてその子はさらに続けて、生まれがよくなければ出世できないし偉くなれないからそういう子はそばへ寄せ付けないようにしましょう、と言ったりします。それを聞いた商人の子は怒ります。なぜならその子の姓もアスセンとって、名前の最後にセンがついているからです。この子のお父さんは、貧しい出でありながらも真面目によく働いて財をなし、今は裕福になっていました。それでこの子は、父の財産が自慢で、私のお父さんはチョコレートを沢山買って、それをみんなにまき散らすこともできるのよ、あなたのお父さんにそれができて、と反論します。そばで聞いていたもの書きの娘は、自分の父の知識を自慢します。それを、一人の貧しい男の子がドアの隙間から覗いて話を聞いていましたが、どれも悲しくなるような話ばかりでした。自分の名も最後がセンで終わるので、世の中へでて偉くなれないと思うと悲しくなりました。でもこうして生まれてきたんだ、りっぱに生まれてきたんだ、と男の子は考えました。そして大人になりりっぱになったのはその男の子でした。名前はトルバルセンといいました。血筋や財産や知識を自慢したあの三人の女の子達は偉くはなりませんでしたがそれぞれ幸福になりました。あの時考えた、言ったりしたことは、あれはただの子供のおしゃべりだったのです、という終わり方をしている童話です。ここにでてくるトルバルセンという名前は、後に世界的に有名な彫刻家になったトルバルセンのことで、今は、コペンハーゲンのトルバルセン彫刻館で彼の

彫刻の数々を見ることができます。彼はアンデルセンと同時代のデンマーク人で、アンデルセンのよき理解者で、アンデルセンも彼のことをとても慕っていました。ついでにいいますとアイルランド系やスコットランド系の人名にもだれだれの息子を意味する言葉がつくものがあります。「マク」というのがそれで、例えばマクドナルドとか、マケンズィとかいうのがそれです。だからマクドナルドというのは、ドナルドの息子という意味なのです。話をアンデルセンの父に戻しますと、彼は文学が好きで、そのため他の靴職人とも交流することも殆どなく、閉鎖的な人で、いつも浮かぬ顔をして物思いに耽ったりしていましたが、アンデルセンをととても可愛がっていました。幼い息子に『アラビアン・ナイト』やデンマークの作家ホルベヤの喜劇やフォンテーヌの寓話を読み聞かせたり、シェイクスピアの劇の真似事をしてみせたりしました。これがアンデルセンの文学への興味の出发点となったことが自伝にも書いてあります。アンデルセンが7才の時、父は崇拜していたナポレオンの軍に加わり出征します。志願した理由は、ナポレオンを崇拜していたこともあるでしょうが、志願するとながしかのお金がもらえたので、それも一つの理由だったようです。しかし、まもなくナポレオン軍が敗退し、軍は解散し、アンデルセンが9才の時、帰国しますが、ナポレオン軍敗退の絶望と疲労で、帰ってきた時には精神に異常をきたして、2年後には錯乱状態になり、1816年に死んでいます。その時アンデルセンは11才でした。アンデルセンの父方の家系には精神病の遺伝が認められ、祖父も精神病を発病していますし、父も先ほどみたように発病し死んでいます。ですからアンデルセン自身も、祖父や父のように、精神病になるのではないかという不安を生涯もっていま

した。これは島崎藤村の苦悩を思い出させます。藤村の父は、国の行く末を憂えたあまり、気が狂って座敷牢で病死していますし、父の他にも姉の園子、姪のたず子、こま子など、家系に精神病患者がいて、自分にもいつかそれが表れるのではないかという不安を感じていました。また、アンデルセンの父方の祖母は、病的な虚言癖をもっていて、ものごとを自分の都合のいいように変えて話す名人でした。それがアンデルセンにも浸透して、彼自身も小さい頃から平気で嘘をつく傾向があったようですが、この祖母もアンデルセンをととても可愛がり、また祖母の想像力や空想力が、のちにアンデルセンの作家としての想像力や空想力に大いに役立つことになるのです。

母親はアンデルセンの父と結婚する前には貧困故に、体を売ったこともあり、そのために私生児も生んでいます。アンデルセンの母方の祖母は三人の私生児を生んでいて、そのことで投獄されたこともありました。アンデルセンの母自身もその私生児の一人だったのです。またアンデルセンの叔母はコペンハーゲンで売春宿を経営していました。当時は貧富の差が激しく、貧しいものはとことん貧しく、生きていくためにはこうしたことも普通にあったようです。結婚二か月後にアンデルセンが生まれれていますので、アンデルセン自身も両親の子かどうか定かではありません。しかし私はアンデルセンの父とアンデルセンの体型や性格が似ていることを考えるとアンデルセン父子は本当の父と子だったように思っています。体型は父も子も細長型で、性格も両者とも神経過敏で陰鬱、自己愛的、空想的な世界にひたり、一方では周囲に自分の価値を認めさせて喝采を浴びようとする自己顕示欲がつよいことがわかっています。彼の出生の真実はわかりませんが、母は字も読めず、考えも古く、息子の好みも理解してや

れない面はありましたが、働き者で、とても綺麗好きな人でした。迷信的だけれども神の導きを信じて、くよくよしない人でした。

しかし、父親の死後再婚した母親との心の隔たりが大きくなり、孤独を味わうようになったアンデルセンは、近くに住むブンケフロート牧師の未亡人と牧師の妹に出会い、その蔵書を借りて読むようになります。そこで初めてシェイクスピアやゲーテの作品に触れることとなります。当時のヨーロッパは階級差別がまだ歴然としてあって、本来ならば貧しい靴屋の息子が牧師の未亡人のところへ出入りできることはなかったのですが、アンデルセンにそれだけの天分と向上心があったからこのような道が開けたということでしょう。それに明るく無邪気で、ものおじしない人なつこさがある、誰にも好かれたようです。ブンケフロート未亡人のところで教養ある世界に触れて、貧しく偏狭な世界から抜け出して、芸術家への道を歩むことを希求するようになります。父の形見の人形を使って『ハムレット』や『リア王』をやってみたり、自分で劇を書いて人に読んできかせたり、いい声していたので、オーデンセ川で歌ったりして自分の夢に向かって動きだします。

ブンケフロート家の人々との交流がのちの童話作品にも影響して、彼の童話の多くが宗教的な色合を濃くだしていきます。しかし、アンデルセンは、堅信礼とあって、14才から15才になると教会の口頭試問を受け、それに合格すると一人前とみなされて、自分の好きな道へ進めれるようになる儀式があった、その時に教会へ行ったくらいで、生涯の殆どを教会とは無関係で過ごしました。だからといって宗教心がなかったわけではなく、何らかの神の摂理が存在することを信じていましたし、自然を神の普遍的教会、キリストを偉大な教師とみなしていました。この考え

方には父親の影響があります。ある時父が、キリストは俺達と同じ人間で、ただ俺達よりずっと偉かっただけだと言ったことがありました。これを聞いた妻はふるえあがり、息子を抱きしめて、あれは父さんにのりうつった悪魔が言わせているんだよと言って、それ以上聞かせないようにしたことがあります。妻の言葉を受けて夫は、俺達の胸の中にある悪魔の他に悪魔なんていやしないんだと言っています。敬虔なクリスチャンは、いいものも悪いものも外から人間の体の中にやってくると考えます。例えば「神が宿る」とか、「悪魔がとりつく」とかいいますが、キリストを人の子と考えたり、悪魔は人間の内にいる、つまり、いいものも悪いものも全て人間の中にあるのであって外から来るものではないという大変急進的な考えの持ち主だったということです。ですから、ブンケフロート家の影響で大変宗教的に考える一面がある一方で、このような父からの影響で、人生について懐疑的な面もありました。だから作品の中にも大変宗教的なものもある反面、不安、恐れ、懐疑に満ちた作品もあるわけで、それがかえってアンデルセンの作品世界を陰影の深いものにしていくという面もあるのです。

そんな子供時代を過ごしていた時、1818年、13才の時に、コペンハーゲンの王立劇場の一座がオーデンセに来て上演します。アンデルセンは父が生きていた時に、オーデンセの劇場へ連れていって貰ったこともありましたが、父は仕事にはあまり精を出さず、自分の好きなことに時間とお金を注いでいたので、大好きな劇場へはお金を工面して時々息子と一緒にいっていました。お金がなくていけない時は劇場のビラ配りのおじさんを手伝ってただでみせてもらったこともありましたが、父譲りの芝居好きだったアンデルセンは、この時来た芝居も見にいきました。こ

の時子役が足りず、羊飼いの少年として舞台に立つことになりました。これで気をよくしたアンデルセンは役者をめざすことになりました。コペンハーゲンへ出ていく前に彼はオーデンセの色々なところで修業します。その熱演とソプラノが評判を呼び、金持ちや貴族の館にまで呼ばれるようになり、彼はオーデンセのナイチンゲールと言われるようになります。ナイチンゲールというのは美しい声で鳴く鳥の名前で、そこから歌のうまい人のことをさすようになりました。

1819年、14才の時に、先ほど言いました堅信礼を受けます。アンデルセンには生涯を通してかなり見栄っぱりで、虚栄心の強い面がありましたが、この時も上流の子やラテン語学校の生徒達に混じって、上級の副監督牧師の方で手続きし、みんなに冷たい目でみられました。またこの時、新しい深靴を作ってもらったのですが、靴がキュッキュツとなるのが嬉しくて、祈りの時も心が靴の方へ行って、神に許しを乞いますが、またしばらくすると心は靴の方へ行ってしまいました。この時の経験をもとに彼は後に「赤い靴」を書くことになります。これは最も厳しく虚栄心を罰している作品です。

3 コペンハーゲン大学入学まで

14才の時に堅信礼を済ませると、母の反対を押し切って、コペンハーゲンの王立劇場へ志願しにいきます。デンマークの子供達は豚の形をした貯金箱をよく使い、アンデルセンもこの貯金箱を壊して、そのお金でコペンハーゲンへ行っていきます。都へ出て有名人になりたい！というのがこの時のアンデルセンの気持ちでしたが、これは彼の生涯を貫く思いだったようです。しかし、劇場へ行って志願しますが、痩せすぎていてだめだと断られます。アンデルセンは絶望して自殺すること

を考えますが、それで一生の思い出に、今やっている悲恋物語を見てから死のうと思ひ、ありがねはたいてみるのですが、次の日にはもう気をとり直して、オーデンセへ帰ろうか、それともコペンハーゲンで手に職つけようかと考えます。この時彼はオーデンセから来る途中馬車で一緒になり、励ましてもらったヘルマンセン夫人のことを思い出し、彼女を訪ねて仕事を世話してもらいますが、職場の人達にからかわれてやめてしまいます。それで今度はどうすると考えていると、オーデンセにいた頃に新聞を読んで知っていたシボーニという王立音楽学校長のことを思い出して彼を訪ねます。そして彼に同情したシボーニの援助を受けれることになります。寄付を募り、下宿も世話してくれました。ところが半年ほどして声変わりがして、高い声が出せなくなりました。

声が潰れて歌手にも俳優にもなれなくなったアンデルセンは王立劇場のパレー部に籍を置かせてもらいながら、劇作家をめざします。ここらへんまではシェイクスピアに似ていて興味深いですね。父親が手袋職人だったシェイクスピアは、彼が若い時にロンドンからやってきた「女王一座」という旅回りの演劇を見て役者を志し、ロンドンへ出るのですが、どうがんばっても役者として芽が出ず、劇の台本書きをめざします。こうしてシェイクスピアは劇作家になり、アンデルセンは後に童話作家になるわけです。しかし、この時はまだ劇作家をめざしていたので「妖精の太陽」という劇を書いて王立劇場へ応募します。審査結果が出るまで、シェイクスピアの作品を訳した人として知られるウルフ海軍大将を訪ねて自作を朗読して意見を聞いたり、世界的科学者エールステッドも訪ねて意見を聞いたりしました。最初は凶々しいやつだと思われるのですが、聞いているうちに彼の純真率直

が相手に心を開かせて、友や援助者となっていきます。彼はこのようにして多くの友や援助者を作っていったのです。生まれながらの抜け目なさのようなものがあつたことがわかりますね。

そうこうしているうちに審査結果が出ます。脚本は不採用になりました。採用されなかったのは、彼は小学校もろくに行かなかつたので、誤字、脱字、文法ミス等が多かつたのです。貧しかつたので行けなかつたこともありましたが、行けた時も真面目に勉強しなかつたようです。しかしそれでも彼の原稿には光るものがあるので、学校へ入つて、きちんと勉強することを勧められます。勧めてくれたのは王室顧問官で王立劇場の経営委員だつたヨナス・コリンでした。コリンは彼の父親代わりとなつてスラゲルセのラテン語学校へ給費生として入れてもらえるように取り計らつてくれました。彼の父の憧れだつたラテン語学校へ入れることになつたのです。父は少年時代に見込みがあつたので村の裕福な人々は彼をラテン語学校へ入れてやろうとしましたが、貧しい両親は一日も早く手に職をつけさせたく、そうした父母の希望に従つて、靴屋の徒弟になつたいきさつがあります。

ところがこのラテン語学校の校長マイスリングがひどい人間で、アンデルセンをいじめめるのです。そして、マイスリング校長がスラゲルセのラテン語学校からヘルシンゲーアのラテン語学校へ転任になると、彼はアンデルセンも転校させて一緒に連れて行きいじめ続けるのです。(図1参照) このヘルシンゲーアはシェイクスピアの『ハムレット』の舞台で、バルト海の入り口にあたる重要な場所として、バルト海へ向かう船は通行税をはらわなければなりません。これはデンマークの大きな税収となつていました。また、マイスリング校長の夫人もいやらしい人で、子

守をはじめとする家事は一切アンデルセンに任せて、自分は娼婦まがいのことをして、アンデルセンにもみだらなことをいつてからかつたりしていました。

この家での生活は心理的拷問室にいるようだつたと自伝に書いてあります。アンデルセンは死ぬ直前にもマイスリング夫妻に苦しめられたことを夢うつつにみてうわごとを言つたと伝えられています。それほど辛かつたのでアンデルセンは死を憧れる気分が強くなつて、1826年、21才の時に「臨終の子」という詩を書きます。疲れたので目を閉じてもいいですか、と母に聞く詩です。この詩は人々の注意をひき、詩人として認められるきっかけになりました。しかし、このことを知つたマイスリング校長は、くだらん詩を書いて時間を浪費した罰として、散歩を禁じました。

ラテン語学校のヘブライ語の先生がみるにみかねてコリンに実状を告げると、コリンはすぐに彼を退学させてコペンハーゲンへ引き取り、部屋を借りてくれました。この部屋は屋根裏部屋でしたが窓からの眺めがよく、この部屋のことがのちに作品に登場します。小説『しがないバイオリンひき』がそうですし、『絵のない絵本』はこの部屋で夜毎月を眺めて着想した連作短篇集です。この『絵のない絵本』は、世界中をまわる月が色々なところで目にしたことを、屋根裏部屋の若い青年画家に語つたことを青年が書き留めたという形で書かれた33編からなるデッサン風の連作短篇集なのですが、その最後の第33夜には4才の女の子の、寝る前の祈りが書いてあります。その女の子は、「我らの日々にパンをあたえたまえ」といつてから、「バターをたくさんぬってちょうだいね」と付け加えるところがありますが、これはアンデルセンの願ひでもあつたのです。アンデルセンはバター

をぬったパンが大好きでした。またデンマークの人はウナギが大好きで、フライにしたりしてブランデーと一緒に頂くそうです。アンデルセンのお母さんが川で洗濯してながしかのお金を稼いでいた時も、寒いのでブランデーを飲んで体を暖めたそうです。また寒い冬はビールを暖めて飲むそうです。

この部屋で彼はコペンハーゲン大学への受験勉強をするわけですが、勉強を手伝ってくれたのは同大学の神学部の学生ルドヴィク・ミュラーという学生でした。アンデルセンの宗教観は原罪とか地獄という概念を信じることはなく、人間の理知によって考え、汎神論的な曖昧なものでしたが、ミュラーは神学部の学生なので、彼の考え方はもっと深刻で、厳粛なものでした。のちにアンデルセンが書くことになる「赤い靴」や「パンを踏んだ女の子」にみられるように、厳しい宗教的色彩の濃いものを書いたのはミュラーの影響だといわれています。ミュラーのおかげで彼は1828年、23歳の時にコペンハーゲン大学へ入学します。これは大変な名誉で、日本だったら東大に合格したような名誉に相当します。

4 4回の失恋と外国旅行

大学に入学した年に自費出版した旅行記『ホルメン運河からアマゲル島東端までの徒歩旅行』が好評を博したり、最初の戯曲『ニコライ塔上の恋』が王立劇場で上演されるなどして、学生時代に作家アンデルセンが誕生しましたが、この頃はまだ童話は書いておらず、詩、旅行記、戯曲を中心とした文芸活動でした。しかしまだ作家活動に専念するだけの自信がなく、迷っていた時に、君は詩人が天職だとヨナス・コリンに言われ、迷いがふっきれて、折角入った大学をやめて作家活動に専念します。

そうした中で、今までのような貧しさや精神病の血やいじめといった苦悩とはまた違った苦悩を味わうこととなります。それは女性に恋して失恋する苦しみでした。1830年、25歳の時のリボア・ヴォイクトという女性への第一回目の失恋をかわぎりに、1846年、41歳の時に4回目の失恋が成就する時まで、16年間にわたって失恋の苦悩を味わい、あれほどの名声を得ながらもついに誰とも結ばれることなく一生を独身で過ごすこととなります。

どうしてそういうことになったのかについて研究者は色々いっていますが、共通していることは、容貌、性格ともに女性に好かれるタイプの男性ではなかったということです。容貌の点からいえば、背がひよる長くそのわりには頭が小さく、手足が長く、全体的にバランスがとれていなくて、デンマークのオランウータンとあだなされていました。性格の方は、ひとりよがりて男らしさに欠け感情の起伏が激しく、世間から作品を悪く批評されると絶望して深く沈みこんだり、やっきになって弁解したり、愚痴をこぼしたり、誉められると有頂天になり、やたら人に読んで聞かせたり、何しろ男性的気概とか頼もしさを感じさせるものが全くなかったようです。デンマークの大批評家ブランデスは、アンデルセンの基本的性格を「功名心の塊」といっています。有名になること、名誉と地位、喝采と称賛を得ることが彼の生き甲斐でした。

アンデルセンは作品が悪評されたり、失恋したりすると、すぐ外国へいってしまうこととなります。1831年、26歳の時に詩集の「空想とスケッチ」が悪評を買ったことと、リボアへの失恋のために、初めて外国旅行にでかけています。この時以降死ぬまでに彼は29回も外国旅行にでかけています。1832

年、27才の時には、ヨナス・コリンの娘ルイーゼに恋をします。しかし、いくらよく面倒をみてやっているからといって、当時は貴族と庶民の結婚は考えられないほど身分差別がしっかりありましたので、とても結婚は許すことができず、すぐに娘を法律家リンドという人と婚約させてしまいます。それでまた1833年、28才の時に、ルイーゼの結婚式直前に外国旅行へでかけます。この旅行ではフランス、スイス、イタリアとまわり、『即興詩人』の着想を得て帰国します。

1835年、30才の時、外国旅行から帰って『即興詩人』を出版すると、すぐにドイツ、スウェーデン、ロシア、イギリス、オランダ、ポーランド等でも翻訳されて、本国よりも先に外国で有名になります。この『即興詩人』というタイトルは、以前デンマークの批評家ハイペアに、あいつは思いつきで詩を作って推敲もしない即興詩人のようなやつだと酷評されたのを覚えていて、その言葉を逆手にとってつけたタイトルなので、主人公の即興詩人のアントニオはアンデルセンのことをさしています。アンデルセンの作品は詩にも劇にも小説にも童話にも、殆ど全ての作品に何らかの形でアンデルセン自身が投影されています。だから彼の文学は回想の文学といわれたりもします。自分のことを回想して作った文学作品ということです。

「即興詩人」のあらすじは次の通りです。イタリアに住んでいたアントニオ母子が祭りにでかけ、狂ったように走ってきた馬車に母親がひき殺され、アントニオはひき殺した貴族の援助で学校へやってもらっているうちに即席で詩を作る才能のおかげで世間に認められていきます。やがてアヌンチャタという歌姫を巡って親友と決闘しますが、その時誤って親友を殺したと思いこみ、またアヌンチャタの愛が友の上にあったと思いきや

ら絶望して漂白の旅にでますが、ある町の場末の劇場で今は声が潰れて落ちぶれたアヌンチャタと巡りあい、本当に彼女が愛していたのはあなただと聞かされますが、彼女は次の日にはどこかへ行方をくらませてしまいます。アントニオは嘆き悲しみますが、最後には美しい少女と結ばれて幸福な生活を送るようになるというハッピー・エンディングのお話です。

この作品は不幸な運命にもあそばれながらも、色々と他人の情を受け、もって生まれた才能だけを頼りに健気に道を開いていった一青年の物語として、世界にも数少ない青春物語の傑作として大評判になりました。日本では1892年、明治25年に森鷗外が訳し始め、10年後完訳しますが、これはベストセラーとなりました。鷗外は明治21年にドイツ留学から帰り、日本の近代化、西洋化を双肩に荷なうこととなります。軍医として国家と国民に尽くし、文筆活動によって啓蒙活動を行ないました。その発表機関として「しがらみ草紙」という雑誌を創刊していますが「しがらみ」とは川の中にあって、上流から流れてきた雑多なものを受け止めて、下流に流さないようにして下流の水を澄ませるようにした装置であるように、文学作品にもいいものもあればわるいものもあるので、それをよりわけていく雑誌であるという意味でつけられた名前です。当時は福沢諭吉を代表とする実学尊重、物質文明偏重の気風が強い中で鷗外は西洋文学を標準とするすぐれた文学の樹立をめざしていました。そうした活動の中でアンデルセンの『即興詩人』を取り上げたのは『即興詩人』の中に文学の見本、模範をみたからです。鷗外の見目は確かで、鷗外訳の『即興詩人』は明治・大正の文壇に大きな影響を与えました。そして鷗外訳の『即興詩人』はイタリアの観光案内としても使われ

木下杢太郎、斎藤茂吉、阿部次郎、小泉信三といった人達はこの本を持ってイタリアを訪れています。

5 童話を書き始める

『即興詩人』の成功で一段落したアンデルセンは、子供が好きだったので童話を書くことによって若い世代に呼び掛けてみようと思えます。『即興詩人』より1カ月後に、最初の童話集『子供のための童話集』を出します。これには経済的な理由もありました。それが成功したといってもあまりお金にはなりませんでしたが。しかし初めて出した童話集が不評で、彼はそれに気をくさらせてしばらく小説に力を注ぎます。この童話集が不評だったのはアンデルセン自身がまだ童話の本質がつかめていなかったことと、読者の無理解によるものでした。

当時の人々はまだ童話というものを精神修養とか教訓話としかみておらず、既存の社会の在り方を教え、社会に適応させるためのモラルを教えるものと考えていました。また子供達には、暗さのない、陽気で明るく楽しい本のみを与えるべきだと考えていました。童話が偽らざる人生の真実をシンプルな形で描き出す象徴詩であるという理解にはまだ至っていませんでした。こうしてアンデルセンは彼独自の童話に対する確たる哲学もまだ定まらず、読者の無理解にもあって、しばらく童話を離れていましたが、田舎へ旅行してみると、大人も子供も喜んで彼の童話を読んでいる姿を見て自信を取り戻し、また童話を書く意欲がわいてきました。こうして書かれたのが「人魚姫」でした。

「人魚姫」は、王子への恋が報いられず、そのため海の泡となることになっても王子を恨まず、報いられることを求めない愛にめざめて全てを神に委ねる話です。こうした結末

には、少年時代ブンケフロート未亡人から学んだ宗教やコペンハーゲン大学の神学部の学生ミューラーから教わった宗教の影響が出ています。彼はこうした人々から、イエス・キリストが自分の命を犠牲にして人類の罪を贖ったことを教えてもらいました。これ以上の愛はないわけで、こうした自己犠牲的愛の素晴らしさを学んでいます。「人魚姫」は大評判になり、子供向けのやさしい童話という形の中にも、人生の深い真実がこめられることに人々は驚き、人々はこれまで蔑視してきた童話という文学形式を改めて見直しました。アンデルセンは童話の地位を高め、童話を独自の文学ジャンルとして確立した功績があるわけです。こうした評判に彼も自信を得て、童話に専念していくことになります。こうして彼は死ぬまでに164編の童話を書くことになります。また、「人魚姫」には、二度の失恋で苦しみを味わった彼自身の苦悩が投影されていて、人魚姫はアンデルセン自身なのです。彼はのちに再び失恋し、深い苦悩と絶望を体験するのですが、その時もその苦悩と絶望を童話化することによって、人生の危機を乗り越えていきました。

彼は1846年、41才の時に、4回目の失恋をします。相手はイエニイ・リンドというスウェーデンの歌姫でした。彼女はスウェーデンのナイチンゲールと呼ばれ、デンマークでも大変な人気で、切符を買うのに前の晩から行列ができたほどでした。声が美しく清らかで、魅力的な女性だったといわれています。彼女はアンデルセンをととても尊敬していましたので、彼も今度はいけると思っていたようですが、こちらの気持ちを示しても、友情とかお兄様という言葉しか返ってこなかったようです。そういうふうにいわれれば、大抵の男はあきらめてしまうのですが、彼はあきらめずに、35才で出会ってから41才

で決定的な別れがくるまで6年間、彼女の「おっかけ」のようなことをしていたのです。

彼女を失って5年後の1851年、46才の時に「ものいわぬ本」という童話を書いています。農家の中庭のあずまやに、まだ蓋をしていない棺が置いてあります。中には、分厚い本を枕にして置かれた若者の遺体が入っています。この人は Upsala 大学の優秀な学生で、古典語もできれば歌も歌え、詩も書けた人です。ところがこの人の身の上に何かがおきてからというもの、勉強も捨て、自分も捨て、すっかり酒に溺れ、体を悪くしてこの田舎にやってきたのですが、養生の甲斐もなく亡くなったのです。Upsala 大学はスウェーデンにありますからそこからイエニイが連想されますし、古典語ができ歌も歌え、詩も書けるというところから、アンデルセンが連想されます。彼は彼女への失恋から自分にもこうなっていた可能性もあったことを書いたのだと思います。ゲーテも25才の時に失恋し、『若きウェルテルの悩み』を書き、ウェルテルに自殺させています。それでもアンデルセンはこの若者のようにはならず生き苦しむの方をとったのです。ゲーテも同じでした。

1852年にイエニイが法律家ゴールドシュミットと結婚したことを知ると、その絶望から翌年1853年に「柳の木の下で」という童話を書きました。クヌートとヨハンネは幼なじみでしたが、ヨハンネは声がよく、そして運が向いてきて、コペンハーゲンのオペラ劇場にでれるようになります。靴屋の修業をしていたクヌートはヨハンネに求婚しますが、私はあなたのよい妹、それ以上はいけないわ、といわれてしまいます。ヨハンネは芸を磨くためフランスへ行ってしまう。傷心のクヌートは傷を癒すために靴の修業をしながら外国をまわります。たまたま靴屋の親

方がクヌートをミラノのオペラ座へ連れていってくれて、そこで偶然ヨハンネと再会し、彼女が他の男と婚約したことを知ります。彼は故郷へ帰りたくなって旅立ちますが、その途中、柳の木の下で眠り、夢をみます。自分がヨハンネと教会で結婚式をあげる夢でした。その時目が醒めたので、今僕は一生のうちで一番楽しかったので、神様、もう一度今の夢をみさせて下さいと行って、再び目を閉じて眠り夢をみます。次の朝柳の木の下で凍え死んだクヌートが発見されるのです。

「柳の木の下で」の2年あとの、1855年には「イブと小さなクリスチーネ」という童話を書いています。イブとクリスチーネもクヌートとヨハンネのように幼なじみなのですが、こんどは二人はお互いに好きになるのですが、クリスチーネが裕福な男性にみそめられ、彼女にもその男性にひかれているところがあることを感じて、巡ってきた幸福をつかむように言って、自分はひきさがります。しかし、何年か後、クリスチーネの夫は無節操な生活で破産して死に、クリスチーネは幼い娘をかかえて貧しい家で明日をもしれぬ病いのところにあります。その間に裕福になっていたイブは、偶然クリスチーネ母子に出会いクリスチーネが息をひきとった後、イブはその子をひきとって育てます。この作品では、イエニイの結婚生活がうまくいかず、どのような形であれ自分を再評価して戻ってきてくれることを願って、このような童話を書いたのではないのでしょうか。好きだった女性に結婚された男性はしばらくはそのように考えて彼女が戻ってきてくれることを待っているようです。

あとがき

この論文は、1999年(平成11年)9月4日に、一宮おやこ劇場協議会の依頼で、

一宮職業訓練センターで行なった講演、アンデルセンの世界——21世紀へ伝えたい豊かな世界——をまとめたものです。講演の雰囲気伝えるために、講演の時の口調や文章表現を殆どそのまま掲載しました。紀要に載せるには1回では多すぎましたので、2回に分けて掲載させていただきます。次回は、アンデルセン童話の特徴と、私の心に残った作品の中から幾つかを選んで、その作品の分析と鑑賞を掲載します。

参考文献

- 1 大畑末吉訳『アンデルセン童話集』全7冊 岩波文庫, 1984
- 2 金田鬼一訳『グリム童話集』全5冊, 岩波文庫, 1979
- 3 森省二『アンデルセン童話の深層』, 筑摩書房, 1998
- 4 野村滋『グリム童話』, 筑摩書房, 1993
- 5 河合隼雄『昔話の深層』, 講談社, 1994
- 6 藤子・F・不二雄『ドラえもん』全45巻 小学館, 1990
- 7 ルーマ・ゴッデン『アンデルセンその偉大な生涯』, 成社, 1980
- 8 山室静『アンデルセンの生涯』, 新潮社, 1975
- 9 山室静『山室静自選著作集第七巻アンデルセンと童話論』, 郷土出版, 1992
- 10 『キリスト教文学の世界13』, 主婦の友, 1977